



震災からの復興と観光 青森・八戸ワシントンホテル

生まれ育った地方を離れ、この春、期待を胸に中央大学へご入学されたフレッシュャーズもいらっしゃるのだらう。ご入学おめでとうございます。とりわけ東北地方ご出身の学生や保護者の方におかれては、万感の想いで今年の桜を眺めているのではなからうか。

東日本大震災から、3度目の春を迎えた。

震災発生直後から中央大学では、学生や教職員、そしてOB・OGらが数々の復興支援活動を行ってきた。それは今も継続して行われている。私ごとではあるが、生まれ故郷の岩手県釜石で親族らを津波で失い、3月に三回忌法要を終えたばかりである。時は過ぎても東北被災地へ、今なお心を寄せている人が数多くいる。明日の日本を担う皆さんが、中央大学で充実した学生生活を送られることを期待してやまない。焦らずゆっくり今を生き、そして将来、ふるさとに、多くの恩返しをしてもらいたい。

底知れぬ魅力の青森

震災以降、東北地方へ仕事で訪ねる機会が増えた。風評被害などで苦しみ観光関係者の皆さんのお役に立てればと、岩手・宮城・福島の被災三県以外にも、積極的に足を運んでいる。特に青森県とご縁が深まり、このところ毎月のように訪ねている。

ちなみに昨夏は、東北三大祭りの一つ・青森ねぶた祭で、県庁の隊列に交じり跳人(はねと)に扮して飛び跳ねた。太宰治が幼少期を過ごし

た五所川原へも、幾度となく足を運ぶ機会を得ている。夏の風物詩・立佞武多(たちねぶた)は青森や弘前のそれとは趣が違って、勇壮な佇まいで圧倒された。しかも五所川原は、鉄道ファンに人気が高い津軽鉄道の発着点にもなっている。冬はストーブ列車に乗ってスルメを焼き、夏は車内で鈴虫の音色に和まされた。十三湖畔では名物しじみラーメンを食して、夜は三味線居酒屋でライブにひたる。斜陽館がある金木地区だけでなく、ディープな楽しみ方を発掘しては記事にした。

また、津軽文化の中心地・弘前や、雪深い冬の鶴田町を訪ね歩いたり、鱒ヶ沢では日本海に沈む夕日を眺め、南田温泉でりんごを浮かべた贅沢な温泉に浸るなど、青森の底知れぬ魅力に惹かれっぱなしのこのごろだ。

その青森は太平洋岸に港町・八戸が位置する。かつて藩政時代、八戸は南部氏が治めていたことから、津軽地方とは違った歴史文化に育まれ発展した。その八戸へ東北新幹線が延伸して、昨年で早や10年。当時は新幹線開業にともない、地域活性化を目的にした八戸屋台村「みろく横丁」もオープンした。B-1グラン



八戸・屋台村「みろく横丁」は八戸ワシントンホテルから歩いてすぐ。新幹線八戸駅から2駅目のJR本八戸駅が最寄り駅

観光客も跳人の衣装を借りて体験が可能な「青森ねぶた祭」。毎年、8月2日～7日まで開催される



りで全国に名を馳せた八戸せんべい汁など、ご当地ならではの食文化を、環境対応型の屋台形式で展開、情報発信する取り組みで、被災地各所の仮設店舗にみられる復興屋台村の原型にもなったとされる。

とはいえ東北新幹線は現在、さらに北上して、新青森が終着駅だ。しかも2015年には北海道・函館まで延伸の予定で、いずれも通過点となる危機感を地元の人たちが抱いている。こと八戸は、県境をまたいで久慈や宮古など岩手三陸リアスと一続きのため、震災後の風評被害にも悩まされた。

その八戸で、観光復興に尽力する白門OBと出会った。南部白門会の幹事長も務める、八戸ワシントンホテルの橋本博文社長(法・1989年卒)だ。はちのへ観光復興委員会の委員も務められ、地元観光の振興と復興にあたられる。

「東北を旅する」という支え方がある。JR東日本のキャッチコピーのとおり、ぜひ今年も、北をめざして旅してほしい。例えば八戸エリアなら、ゼロエミッション(自然界への排出ゼロ)を掲げる「あおもりエコタウン工場群」や「六ヶ所村次世代エネルギーパーク」など、環境やエネルギー関連施設を視察することもできる。新鮮な海の幸を求めて「八食センター」にも立ち寄りてみよう。人気の回転寿司店は行列ができるので、お早めにお宿では橋本先輩が、きっと笑顔で出迎えてくれるだろう。

略歴 ちば・ちえこ 観光ジャーナリスト。横浜商科大学講師。中央大学経済学部卒。著書に「観光ビジネスの新潮流」(学芸出版社)など多数。